

栃木県栃木市岡之内遺跡A地点第2次発掘調査概報

長 崎 潤 一・大 網 信 良・山 崎 太 郎
渡 邊 玲・佐 藤 悠 登

はじめに

栃木県永野川流域では、栃木市星野町在住だった齋藤恒民氏によって数多くの遺物が採集されている。旧石器時代から縄文時代までの多くの遺跡が知られているが、昭和40年代には東北大学の芹沢長介教授によって後期旧石器を遡るいわゆる「前期旧石器」の石器群を目的として、星野遺跡の調査が行なわれた。芹沢教授は星野遺跡で採集されたチャート製石器の中に周辺から求心的な剥離を行う石核を見だし、鹿沼パミス下位の後期旧石器を遡る時期の所産と確信しての調査であった。永野川流域ではやや下流域の栃木市向山遺跡でも芹沢教授は調査を行い、鹿沼パミスの上下で石器を検出した。

2013年、永野川流域の遺跡に詳しい酒巻孝光氏の案内で、この流域の遺跡踏査を行なった。有舌尖頭器やナイフ形石器が表面採集されていた岡之内遺跡では石鏃や黒曜石剥片などを採集することができた。そこで2013年夏に文学部考古学コース2年生の夏期実習発掘として岡之内遺跡A地点1次調査を行なった（長崎ほか2015）。

この1次調査では、いくつかの課題や疑問点が生じた。表土を剥いだ範囲も縄文時代の遺構をローム層上面で確認したが遺構を完掘できなかったし、調査区南側にむかって層厚を増す縄文時代遺物包含層の分布範囲を確認できなかった。疑問点としては、数メートル離れたグリッドのローム堆積層の対比が困難だったり、鹿沼パミスの検出深度やその産状がグリッドによって大きく異なったりした。そのためローム層基本層序を確認することができなかった。ナイフ形石器や有舌尖頭器が表面採集されているのに旧石器時代の包含層であるローム層の基本層序や堆積状況が判然としなかったことに戸惑った。

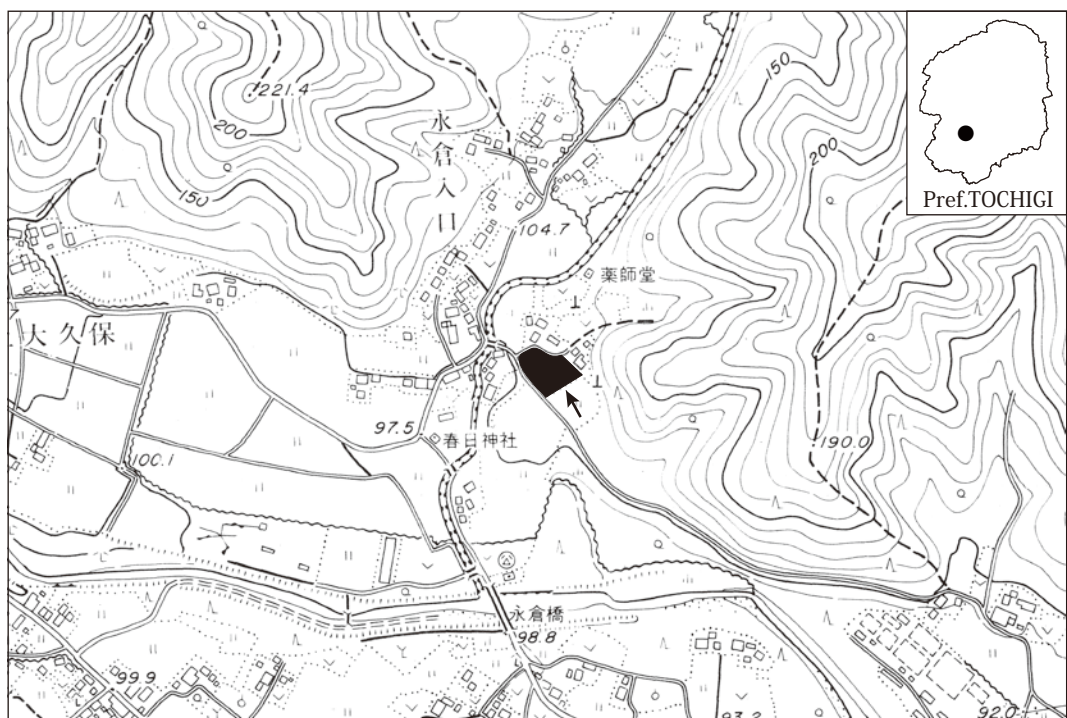
2次調査では上記の課題や疑問点の解消と、縄文草創期・旧石器時代の遺構・遺物の検出が調査目的となったのである。

（長崎潤一）

1. 調査に係る行政手続き

本調査に係る行政手続き関連の文書は以下の通りである。

- ①平成26年7月4日「埋蔵文化財発掘調査の届出について」
(早稲田大学文学部考古学コース発、栃木県教育委員会宛)
- ②平成26年7月25日「埋蔵文化財の発掘調査について(通知)」(文財第1-6号)
(栃木県教育委員会発、早稲田大学文学部考古学コース宛)
- ③平成26年8月5日「埋蔵文化財の発掘調査について(通知)」(栃文第327号)
(栃木市教育委員会発、早稲田大学文学部考古学コース宛)
- ④平成26年9月25日「埋蔵物発見届」
(早稲田大学文学部考古学コース発、栃木警察署宛)
- ⑤平成26年9月25日「埋蔵文化財保管証」
(早稲田大学文学部考古学コース発、栃木県教育委員会宛)
- ⑥平成26年10月2日「埋蔵物の文化財認定及び文化財の帰属について」(文財第4-15号)
(栃木県教育委員会発、早稲田大学文学部考古学コース宛)



第1図 岡之内遺跡A地点の位置(縮尺1万分の一)

⑦平成26年10月15日「埋蔵物の文化財認定について」(栃警会号外)

(栃木警察署発、早稲田大学文学部考古学コース宛)

2. 調査の概要と調査組織

岡之内遺跡A地点第2次調査の概要および組織は以下の通りである。なお、役職や学年は調査当時のものを表記している。

【調査対象】 岡之内遺跡A地点 (第2次調査)

【所在地】 栃木県栃木市大久保町351ほか

【調査主体】 早稲田大学文学部考古学研究室

【調査期間】 2014年9月2日～9月20日⁽¹⁾

【調査の種類】 学術調査

【調査面積】 44m²

【調査担当】 長崎潤一 (教授)

【調査指導】 近藤二郎 (教授)・高橋龍三郎 (教授)・寺崎秀一郎 (教授)・城倉正祥 (准教授)・田畑幸嗣 (准教授)

【調査協力】 栃木県教育委員会・栃木市教育委員会

【調査庶務】 大網信良 (助手)

【調査参加者】 福岡佑斗・松永修平・村尾真優・山崎太郎・山田綾乃・渡辺 萌・渡邊 玲 (以上、考古学コース大学院生)、佐藤悠登・富樫洋介・根本 佑 (以上、考古学コース4年生)、石井友葉・井上早季・木村結香・小長谷芽依・小林和樹・佐藤美穂・福本彩夏・真下直貴・山本華 (以上、考古学コース3年生)、有村元春・池山史華・石森翔太・岩丸哲大・小形恵理・小川大貴・金井 啓・川村綾子・久保田大介・熊野美緒・隈本道厚・呉 心怡・佐々木啓介・佐藤優芽・佐藤亮太・佐藤凜太郎・塩澤史大・谷川 遼・中野花恋・野口佳恵・野添滉一・原畑 遥・平石瑞穂・比留間綾香・福田航介・古屋美優・堀川洸太郎・堀 愛・本間 祥・松島朋哉・三根大明・望月明日香・山本 彩・幸 大樹・横山未来 (以上、考古学コース2年生)、野口綾花 (早稲田大学考古学研究会学部2年生)

なお、本概報をまとめるにあたり、上記参加者以外に石崎野々花、川上真那、川村悠太、桐原弘宣、鈴木宏和、中村佳織、星野宙也が整理作業に参加した。

3. 調査の経緯と方法および調査経過

(1) 調査経緯

2013年に実施した第1次調査では、現地形の成り立ちを把握するべく、台地西端に2×10mのトレンチを3箇所(A～Cトレンチ)設定した。調査区の大半は表土直下でハードローム層が検

出され、ローム上面で遺構確認を行った結果、近年の耕作痕が多数検出された。

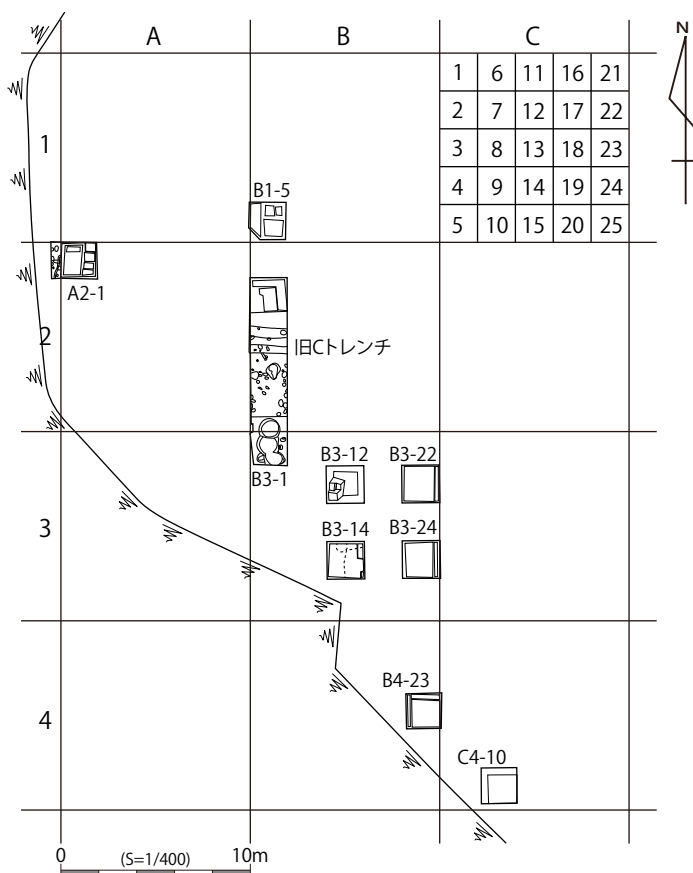
A・Bトレンチでは、耕作痕の調査・記録を行ったのちトレンチ内に2×2mのグリッドを設定し、一部でローム掘削を実施した。掘削は赤城-鹿沼軽石層（以下、Ag-KP層あるいはKP層と略）を鍵層として進めたが、地点によって同層の検出標高にばらつきがあり、当地が谷堆積のような不安定な地形環境にあることが判明した。

地形的にやや下るCトレンチでは、南にいくにつれ縄文土器片を含む暗褐色～黒褐色の遺物包含層が厚く堆積していた。また包含層下のローム層上面では土坑数基が検出された。調査期間の都合上、土坑の調査は一部に限られたが、調査区の南・東方面ではさらに遺物包含層が広がる傾向にあり、それに伴い比較的良好に遺跡が保存されていることが推測された（長崎ほか前掲）。

よって今回の第2次調査では、①遺跡内の基本層序の確認、②包含層遺存エリアでの旧石器時代以降の土地利用状況、の二点を明らかにすべく、第2図の通り調査区を設定した。まず第1次調査で設定したトレンチ、グリッドを軸として10m×10mの大グリッドを設定し、その中を2m×2mの小グリッドに区分した。小グリッドは北西隅を起点にグリッド番号を付し、このうち旧Aトレンチの南端にあたるB1-5、旧Bトレンチ西端にあたるA2-1、旧Cトレンチの北端にあたるB2-2、および旧Cトレンチ南端にあたるB3-1に再び調査区を設定、また新たにB3-12、B3-14、B3-22、B3-24、B4-23、C4-10の6つの小グリッドを掘削し、遺構・遺物の残存状況、土層の堆積状況を確認した。（大網信良）

（2）調査の方法

調査は昨年同様に、遺物・遺構ともにトータルステーションを用いて位置情報を



第2図 第2次調査全体図

記録した。標高値も含めた測量基準点は、一次調査で設定したものを復旧し、誤差に問題がないことを確認した上で引き続き使用した。

掘削は表土から人力で行い、表土下に後述する遺物包含層が検出された場合は、これを全て5mmメッシュの乾ふるいにかけた。埋め戻しに際しては、遺構の保護のためにトレンチ際およびトレンチ底面に土嚢を敷き、その後掘削土を充填した。出土遺物は早稲田大学文学部考古学研究室で保管しており、整理・報告後に栃木市教育委員会に返還する予定である。

(3) 調査経過

本調査の経過は以下のとおりである。

- 9月2日 先発隊が現地に到着。トイレ・テントの設営。調査区内の除草開始。測量によるグリッドの設定。
- 9月3日 第1クール開始。測量杭の設定・除草が完了。新規発掘区の表採、および第一次調査区の埋め戻し土の除去。
- 9月4日 第一次調査区の埋め戻し土の除去終了後、写真撮影。A2-1グリッドのローム層掘削、B3-1にて遺構確認、B3-12・B3-14・B3-22・B3-24の表土掘削をそれぞれ開始。
- 9月5日 B3-12・B3-14・B3-22・B3-24の表土除去が終了し包含層掘削開始。
- 9月6日 各グリッドの遺構確認、ローム層掘削、包含層掘削を継続。A2-1の写真撮影。
- 9月7日 雨天のため遺物水洗と現場作業を併行。A2-1の断面図作図終了。第1クール終了。
- 9月8日 上級生作業日。遺構確認、ローム層掘削、包含層掘削を継続。
- 9月9日 第2クール開始。B2-2のローム掘削開始。
- 9月10日 B4-23・C4-10の表土掘削開始。B3-1の遺構撮影、断面図作図終了。
- 9月11日 B4-23・C4-10の表土掘削終了。土層確認のためのサブトレンチの掘削開始。
- 9月12日 掘削作業を継続。B3-12にてローム層掘削開始。
- 9月13日 掘削作業を継続。第2クール終了。
- 9月14日 上級生作業日。雨天のため室内作業。
- 9月15日 第3クール開始。遺跡全景写真空撮。
- 9月16日 B1-5のローム層掘削開始。C4-10の写真撮影、断面図作図終了。
- 9月17日 B3-24でローム面検出。層序確認のためサブトレンチを掘削。B2-2の掘削終了、写真撮影、断面図作図終了。
- 9月18日 B1-5・B3-14・B3-22・B3-24・B4-23の写真撮影、断面図作図終了。B3-12の写真撮影。調査区内の養生、埋め戻しを開始。第3クール終了。
- 9月19日 上級生作業日。B3-12の断面図作図および埋め戻し終了。トイレ・テントの撤収完了。

(山崎太郎)

4. 基本層序

本年度の調査で確認された岡之内遺跡A地点の基本層序は、堆積状況が良好であったA2-1グリッドの層序に基づいて以下の通り設定した。

I 層：表土層

II a 層：縄文時代以降の遺物包含層上部

II b 層：縄文時代以降の遺物包含層下部

II c 層：遺物包含層とローム層の漸移層

2 層：ソフトローム層

3 層：ハードローム層

4 層：暗褐色ローム層（立川ローム層の暗色帯に対比されると考えられる。）

5 層：細粒ローム層

6 層：赤城-鹿沼軽石層（Ag-KP 層）

II a 層・II b 層は共に縄文時代以降の遺物包含層であるが、しまり、粘性、色調等の土の性質の違いにより、上部と下部に分割した。また6層の上部は青灰色・白色パミス層で、下部は橙色軽石層（本体）で構成される。

以下の各調査区での土層表記について、遺構埋土や基本層序とは堆積状況が異なる山崩れ堆積については、各グリッド毎に上層から①層、②層…と名称を与えている。また、上記の基本層序として分層したが性質・含有物が異なる土層については、「I」を付して区別し記載した。

（渡邊 玲）

5. 検出された遺構と遺物

（1）5～7号土坑（第3図）

5号・6号・7号土坑は、B3-1グリッドの地表下約40cmのハードローム上面（3層上面）で検出された。5号土坑は第1次調査で既にプランを確認しており、今回の調査でB3-1グリッド南端の暗褐色土層をローム上面まで掘削したところ、南北に重複しながら連なる3基の土坑が確認された。土坑同士の新旧関係は、6号土坑が5号土坑を切り込むが、6・7号土坑は新旧が不明瞭であった。

5号土坑は、平面形が東西112cm×南北104cmの円形で円筒状の断面形態を呈し、確認面からの深度は92cmを測る。埋土は黒褐色土を主体とするが、一部ロームブロックを多く含む箇所がある。縄文早期後葉～前期前葉の土器片が出土している。

6号土坑は、平面形が東西116cm×南北104cmの円形で、円筒状の断面形態を呈し、確認面からの深度は80cmを測る。埋土は黒褐色土を主体とし、縄文早期後葉の土器片が数点出土している。

また埋土上～中層では中期後葉・加曽利E式の鉢把手部が出土した。

7号土坑は、平面形が東西112cm×南北48cmの楕円形で、円筒形の断面形態を呈する。確認面からの深度は64cmを測る。埋土は黒褐色土を主体とし、縄文前期前葉の土器片がわずかに出土している。各土坑の土層注記は以下の通りである。

< 6号土坑 >

- ①層：黒褐色土 (10YR2/3)。しまり普通、粘性強い。ローム粒子2%。
- ②層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通、粘性普通。ローム粒子2%。
- ③層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通、粘性弱い。ローム粒子3%。
- ④層：黒褐色土 (10YR3/2)。しまり普通、粘性普通。ローム30%。

< 7号土坑 >

- ⑤層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通、粘性普通。ローム粒子8%。
- ⑥層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通、粘性普通。ローム粒子3%。
- ⑦層：黒色土 (10YR2/1)。しまり普通、粘性普通。ローム粒子3%。

< 5号土坑 >

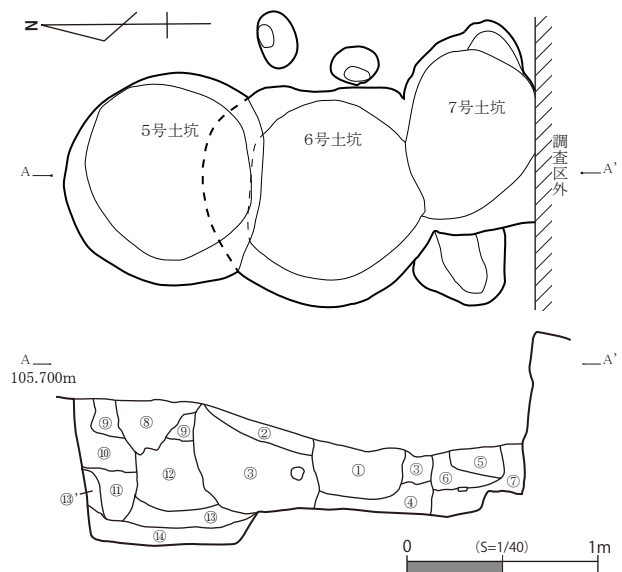
- ⑧層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通、粘性弱い。ローム粒子3%。
- ⑨層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通、粘性普通。ローム粒子3%。
- ⑩層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通、粘性普通。ローム粒子1%。
- ⑪層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通、粘性普通。ローム粒子6%。
- ⑫層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通、粘性普通。ローム粒子7%。
- ⑬層：黒褐色土 (10YR3/2)。しまり

普通、粘性普通。ローム（ブロック含）70%。

⑬'層：黒褐色土 (10YR2/2)。しまり普通 粘性やや強い。ローム（ブロック含）10%。

⑭層：暗褐色土 (10YR3/3)。しまり普通、粘性普通。ローム（ブロック含）60%。

5～7号土坑は、それぞれ遺構の形状に類似性が高く、また出土遺物も縄文時代のものに限られることから、縄文早期後葉～前期前葉に比定される土坑群と思われる



第3図 5～7号土坑平面図・土層断面図

る。但し周囲には植栽痕も多く遺存状態が良好でないため、詳細不明な点も多い。（大網信良）

（２）A2-1グリッド（第４図）

ローム層序確認のため、第１次調査でローム層の堆積状況が良好であった調査区西端のB-1グリッドを今年度の調査区設定にあわせA2-1グリッドと名称変更し、ローム層掘削を行った。地表面からの最大掘削深度は、約230cmを測る。以下にA2-1グリッドの土層註記を示す。

I層：表土層

2層：ソフトローム層。黄褐色土（7.5 YR3/3）。上位は色調が暗い。軟質で粗粒、ボソボソしておりしまりは弱い。下部に径1～2cmのロームブロックを含む。

3a層：ハードローム層。明黄褐色土（7.5YR5/6）。最上部では径2cm大のブロック状になる。細粒で軟質。全体に径1mm大の黑色鉱物を含み、上半部は径1mm以下の白色パミスを、中位は径2～5mm大の炭化物を、下半部は径1mm大の赤色粒子を含む。

3b層：ハードローム層。明黄褐色土（7.5YR5/6）。3a層より色調が僅かに暗い。軟質だがしまりは強い。全体に径1～2mmの炭化物を含む。3a層と区分の困難な部分もある。

3c層：ハードローム層。明黄褐色土（7.5YR5/8）。3b層より色調が明るい。3層の中で最も軟質で、しまりはやや弱い。径1mm以下の白色パミスを多く含む。

4層：暗褐色ローム層。褐色土（7.5YR4/4）。暗色帯と思われる。細粒で硬く、しまりが非常に強い。青色灰色のスコリアを含む。径3～8mm大の橙色粒子を多く含む。下半部は径1mm大の白色パミスを多く含む。下方に行くにつれ橙色軽石が増える。

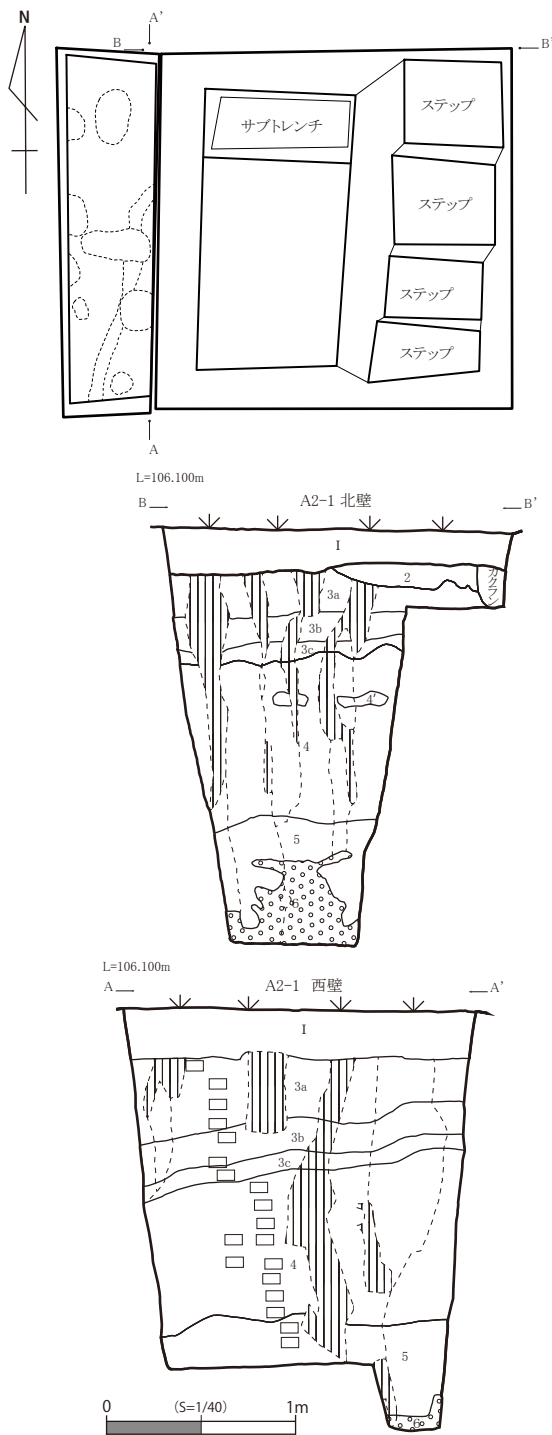
4'層：褐色ローム層。4層の中にブロック状に分布。細粒であるが軟質でしまりは弱い。4層より色調が明るい。特に西壁で顕著。青灰色・白色パミスを多く含む。

5層：細粒ローム層。明褐土（7.5YR5/6）。4層とよく似るが色調はやや明るい。細粒できわめて硬くしまりは非常に強い。橙色軽石を多く含む。

6層：橙色軽石層。橙（7.5YR6/8）。KP層下部。上面は激しく波打つ。インポリューションか。

A2-1グリッドの表土層（I層）下の縄文時代以降の遺物包含層（II a層・II b層）は削平を受け消滅しており、ソフトローム層（2層）が北壁の一部で見られた。地表下200cmでKP層（6層）が確認されたため、サブトレンチを設定し掘削した結果、5層下に6層が一定の層厚をもって堆積することを確認し、本地域の一般的な層序堆積と矛盾しないことから、6層を一次堆積層土と判断した。

また、第１次調査のB-1西壁セクションでみられた「耕作痕」は今年度調査の北壁でも確認され、精査した所、6層中にまで至る地割れであることが判明した。西側に掘削区を拡張したところ、表土直下より北北東－南南西方向に走る地割れの痕跡が検出された。表土層内には地割れの痕跡が見えないこと、地割れ内の土はII a層・II b層に類似することが観察された。このことか



第4図 A2-1グリッド平面図・土層断面図

ら地割れの発生時期は、ロームの堆積後からⅡa・Ⅱb層削平以前までの時期であると推定される。当該期間のこの地域における地割れの原因となるような出来事として、平安時代に編纂された『類聚国史』に記録が残る、弘仁2年(818年)に赤城山南麓を中心に被害のあった地震があげられる⁽²⁾。(佐藤悠登)

(3) B3-12グリッド(第5図)

B3-12グリッドは表土層(Ⅰ層)を15cm掘削し、縄文時代以降の遺物包含層上部(Ⅱa層)上面を確認した。引き続きⅡa層、遺物包含層下部(Ⅱb層)および漸移層(Ⅱc層)を掘削し、地表下約70cmでソフトローム層(①層)上面を確認した。この間遺構は確認されなかった。その後、旧石器時代遺物の確認とローム層下の堆積状況確認のためローム層を掘削した。最終的な掘削深度は地表下約230cmを測る。以下、B3-12グリッドの土層註記を示す。

Ⅰ層：表土層。黒褐色土(10YR3/2)。

Ⅱa層：縄文時代以降の遺物包含層上部。黒褐色土(10YR2/2)。しまりは弱く、粘性も弱い。径3mm以下のローム粒子・炭化物を微量含む。

Ⅱa'層：ロームブロックを多量に含むⅡa層。

Ⅱb層：縄文時代以降の遺物包含層下部。黒褐色土(10YR2/3)。しまりはやや強く、粘性は弱い。径3mm以下のローム粒子を少量、径3mm以下の炭化物を微量含む。ところにより白色粒子を微量含む。

Ⅱc層：漸移層。暗褐色土(7.5YR3/3)と褐

色土（10YR4/4）が混在。しまりは弱く、粘性も弱い。径3mm以下の炭化物を微量含む。

①層：ソフトローム層。褐色土（10YR4/6）。
KP粒子、白色粒子を微量含む。基本層序の2層に
対比される。

②層：橙色軽石を多量に含むソフトローム層。

③層：ハードローム層。明褐色土（7.5YR5/8）。
しまり・粘性ともに非常に強い。白色粒子、橙色
軽石を微量含む。基本層序の3層に対比される。

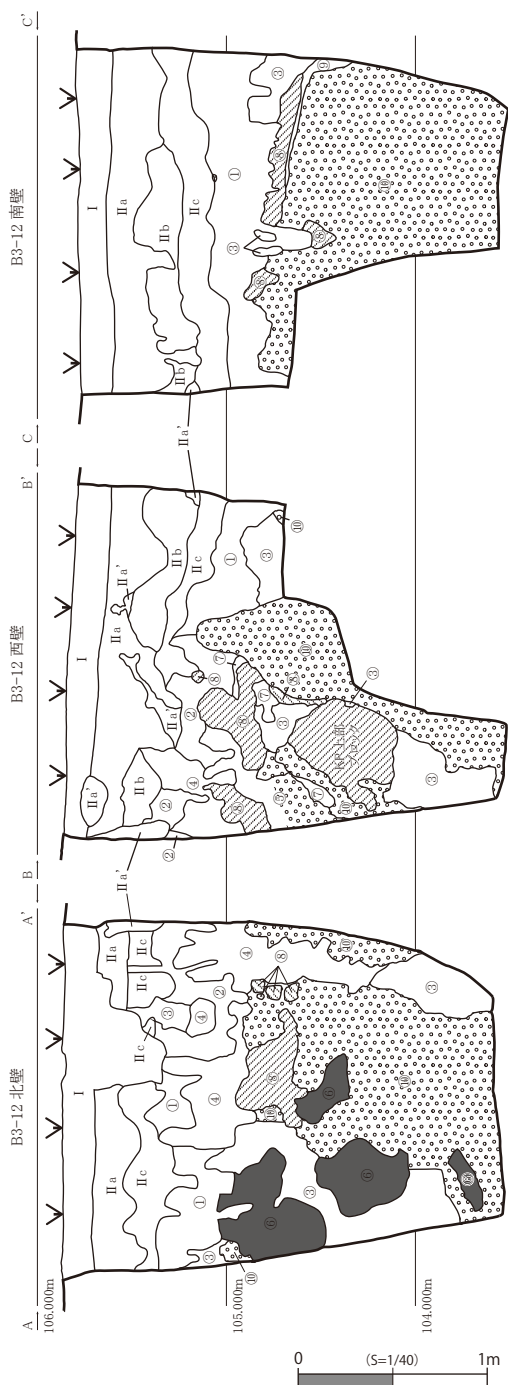
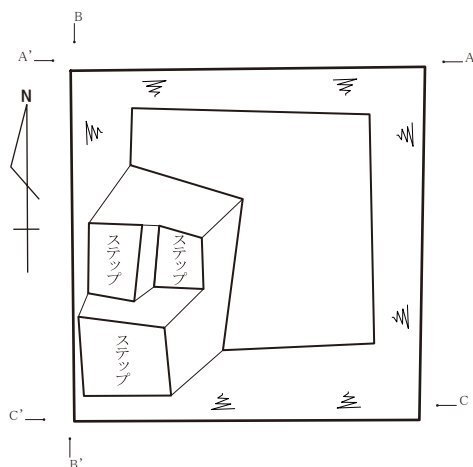
④層：ハードローム層。明褐色土（7.5YR5/6）。
基本層序の3層に対比されると思われるが③より
しまりが弱い。

⑤層：橙色軽石を多量に含むハードローム層。

⑥層：暗褐色ローム層。褐色土（10YR5/6）。し
まりは非常に強く、粘性は普通。③より色調が暗
い。基本層序の4層に対比される。

⑦層：細粒ローム層。しまり・粘性ともに非常
に強い。橙色軽石を多量に含む。基本層序の5層
に対比される。

⑧層：KP層上部の青灰色・白色パミス層。径3mm
以下の白色粒子で構成される。基本層序の6層上
部に対比される。



第5図 B3-12 グリッド平面図・土層断面図

⑨層：白色粘土層。粘性が強い。水分量が多くKPを含む。

⑩層：KP層下部の橙色軽石層。KP本体で基本層序の6層下部に対比される。

Ⅱa・Ⅱb層の堆積は北側で約20cm、南側で約40cmと差があり、層厚約20cmのⅡc層を挟んで次第にソフトローム化していく。Ⅱb層は南西寄りでのみ部分的に確認される。ローム層下の堆積は乱れており、南側と北側で堆積状況が異なる。南側では、①層が約30cm堆積し、直下にKP層上部の灰色砂層（⑧層）、下部の橙色軽石層（⑩層）が続く。ハードローム層（③層）はブロック状に確認されるのみである。北側では、ソフトローム、ハードローム、暗褐色ローム（暗色帯）、KP層上部・下部といった基本層序の各要素は確認できるが、それらはブロック状に乱れて混在し、上下逆転して堆積する箇所も散見された。西壁セクションで確認できる径50cmを超えるKP層上部の灰色砂層ブロックと北方向に崩れるKP層下部の橙色軽石層、ハードローム層とKP層が上下逆転している堆積状況から、本グリッドでみられるローム層以下の堆積の乱れは、KP層を含む堆積層ブロックが山崩れなどにより崩れて動いたことが原因であると考えられる⁽³⁾。

本グリッドでは表土層から石鏃などが出土しているが、Ⅱa・Ⅱb層で目立った出土遺物はなく、またローム層中での遺物の出土もない。

（4）B3-14グリッド（第6図）

B3-14グリッドは表土層（Ⅰ層）を約30cm掘削し、縄文時代以降の遺物包含層上部（Ⅱa層）を部分的に確認した。その後、Ⅰ層およびⅡa層を掘削中、グリッド北側で土師器集中部が確認された。遺構プランは確認されなかったため、引き続き掘削を進め、地表下約50cmで縄文時代以降の遺物包含層下部（Ⅱb層）を確認した。さらにⅡb層を約15cm掘り下げ、漸移層（Ⅱc層）を確認、遺構確認を行った。しかし、Ⅱc層にⅡb層が斑状に入り、遺構の境界が不鮮明なため、Ⅱc層を掘削、加えてサブトレンチを2か所設け、Ⅱc層の堆積状況と再度遺構確認を行った。地表面からの最大掘削深度は約85cmである。検出された遺構としては、土師器集中部1箇所、古墳時代～古代の竪穴住居址1軒が挙げられる。以下、B3-14グリッドの土層注記を示す。

Ⅰ層：表土層。黒褐色土（10YR2/3）。

Ⅱa層：縄文時代以降の遺物包含層上部。黒褐色土（10YR2/2）。しまり・粘性ともにやや弱い。径3mm以下のローム粒子・炭化物を微量含む。

Ⅱb層：縄文時代以降の遺物包含層下部。黒褐色土（10YR2/2）。しまりはやや強く、粘性は弱い。径3mm以下のローム粒子・炭化物を微量含む。色調はⅡa層よりやや明るい。

Ⅱc層：漸移層。暗褐色土（10YR3/4）。径3mm以下のローム粒子・炭化物を微量、径2cm程度のロームブロックを微量含む。

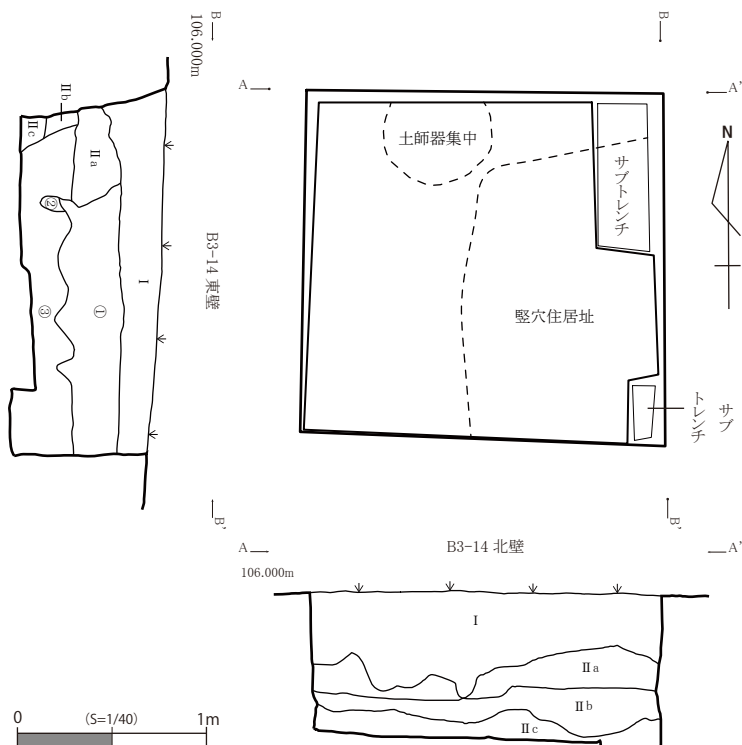
①層：黒褐色土（10YR2/3）。Ⅰ層より粘性が強い。

②層：黒褐色土（10YR2/2）。①層よりしまりが弱い。

③層：竪穴住居址覆土。

黒褐色土（10YR2/3）。粘性、しまりともに強い。

土師器集中部はグリッド北側に径約30cmの範囲で広がる。Ⅰ層とⅡa層の境に集中している。本来土坑等が存在した可能性も考えられるが、遺構プランは確認されなかった。竪穴住居址は全体の4分の一程度の検出で隅丸方形を呈し、東側および南側の未調査区にプランが広がる。住居跡埋土は、Ⅱb層からⅡc層を掘り込んでいる。



第6図 B3-14 グリッド平面図・土層断面図

粘性、しまりともに強い暗褐色土からなる単層（③層）のみを確認している。Ⅱ層からは土師器の他、ポイントフレークなどの石器も出土している。

（渡邊 玲）

（5）C4-10グリッド（第7図）

C4-10グリッドは、今回の調査したグリッドの中では最も南東に位置している。表土層（Ⅰ層）掘削後、グリッドの北側と西側に幅約50cmのサブトレンチを開け、土層の確認を行った。その結果、地表下約65cmまで掘削したところでローム面を確認した。本グリッドでは、土層観察を行った北壁、西壁ともに遺物包含層（Ⅱa層）に対して表土層からの浅い掘り込みが確認された。また、西壁ではⅡa層以下の層がなだらかに南に下っていることが確認された。現在の地表面では比高差はほとんど見られないが、Ⅱa層上面では約20cmの比高差が見られる。以下、C4-10グリッドの土層注記を示す。

Ⅰ層：表土層。黒褐色土（10YR2/2）。しまりなし。粘性なし。ローム粒子を微量含む。

Ⅱa層：遺物包含層。黒色土（10YR1.7/1）。しまりなし。粘性なし。ローム粒子を微量含む。

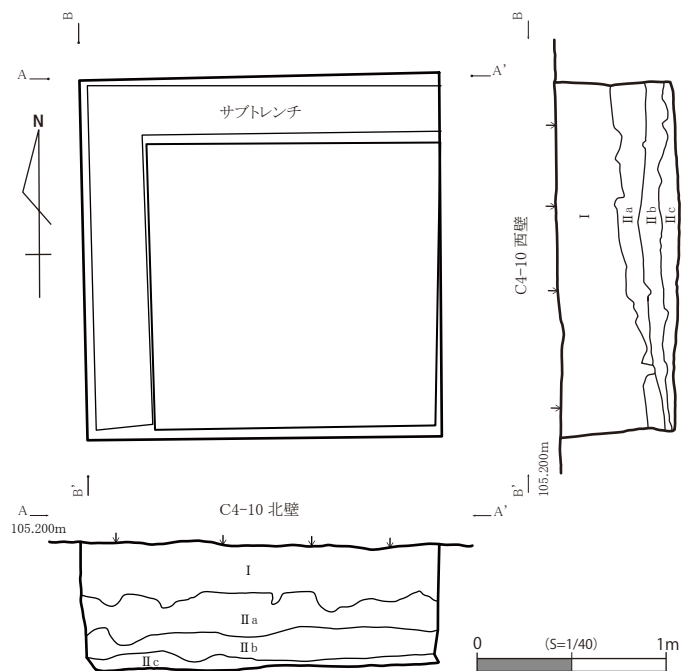
Ⅱb層：遺物包含層。黒色土（10YR1.7/1）。しまりあり。粘性ほとんどなし。Ⅱc層の黄褐色ロームブロックの

混入が数ヶ所見られる。南寄りのみローム粒子を微量含む。

Ⅱc層：遺物包含層とローム層の漸移層。しまりややあり。粘性なし。Ⅱc層の黒色(10YR1.7/1)と黄褐色ロームブロック(10YR 7/8、1～2cm角)が混在。

本グリッドでは明確な遺構は検出されなかった。表土から遺物包含層への掘り込みは耕作痕であると考えられる。また、本グリッドでは北から南への土層の傾斜が確認された。昨年の調査において、B 2グリッドからB 3グリッドに向け

南方へ旧地表面の傾斜が確認されており、本年もB4-23グリッドで同様の傾向が得られているため、これは旧地形を表したものであると考えられる。包含層中からは縄文時代早期末葉の土器片が数点出土している。



第7図 C4-10グリッド平面図・土層断面図

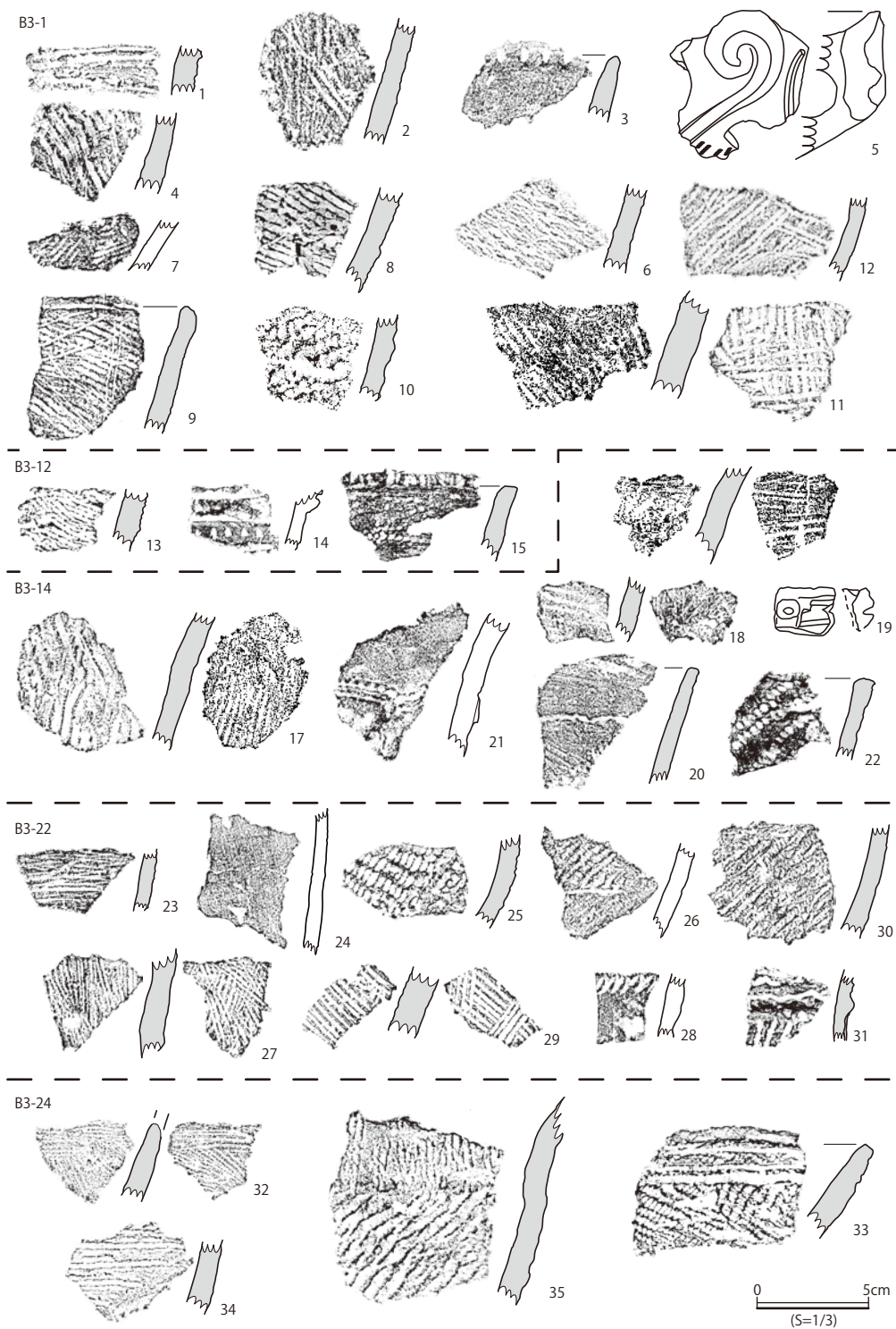
(6) 出土土器の概要(第8・9図)(第1・2表)

本調査では、破片資料ではあるが縄文時代早期から後期までの土器が出土した。特に、早期後葉から前期中葉の繊維土器が多く見られた。以下、各トレンチの出土土器の概要を述べる。なお、以下に記載する資料番号は、第8図・第9図および第1表・第2表の番号と対応する。

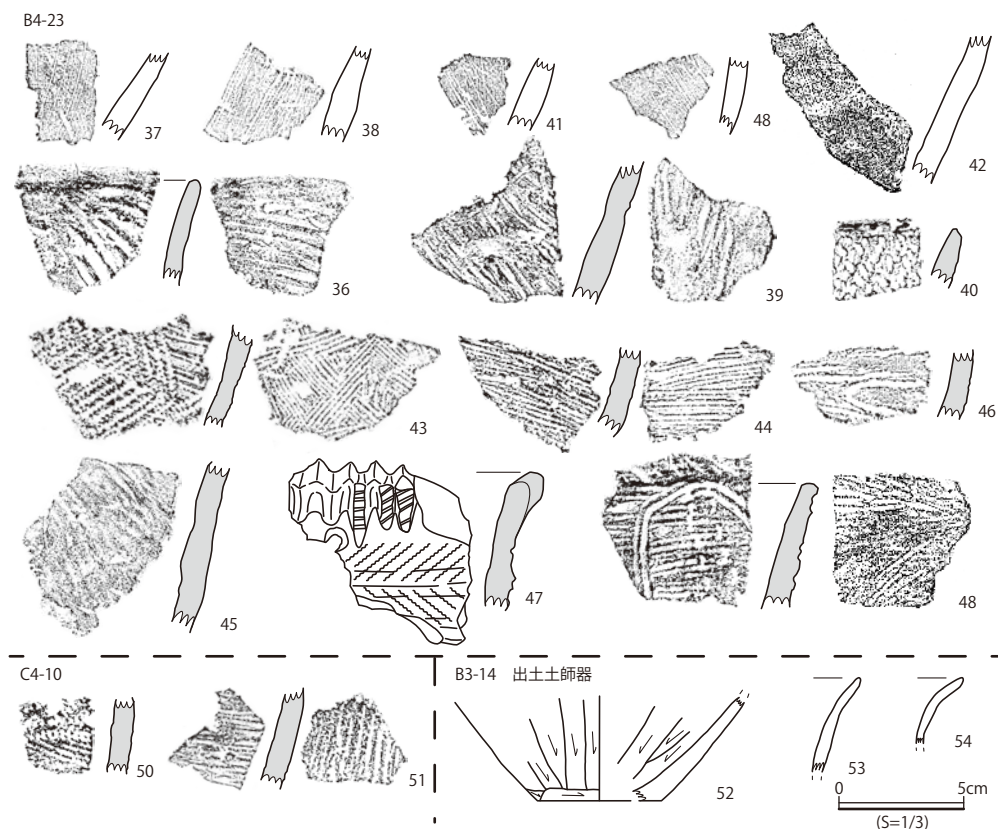
1から12はB3-1グリッドで出土した土器である。本グリッドからは早期後葉(1、2、4、11)、前期前葉(3、10)、前期中葉(6、12、13)の土器の出土が多い。6号土坑からは前期中葉(6)の他、中期後葉(5)から後期(7)の土器が見られた。特に5は、深鉢土器の把手で部分的に赤彩が残る。

13から15はB3-12グリッドから出土した土器である。本グリッドからの遺物の出土は少なく、前期前葉(15)、前期中葉(13)、中期中葉(14)の土器が出土している。14は、棒状工具により沈線と列点が施文され、胎土には金雲母を多く含む中期中葉・阿玉台式と考えられる。

16から22はB3-14グリッドから出土した土器である。本グリッドからは早期後葉(16、17、18、20)、前期前葉(22)の他、中期中葉(21)、後期前葉(19)の土器が出土した。19は、鉢形



第8図 第2次調査出土土器①



第9図 第2次調査出土土器②

土器の胴部である。隆帯と装飾を器面に貼り付け、装飾部へ穿孔を行って8の字状の文様としている。内面は剥落している。文様の特徵から後期前葉の堀之内式と考えられる。

23から31はB3-22グリッドから出土した土器である。本グリッドからは早期後葉（23、27、29）、前期前葉（25、30、31）、中期前葉（26、28）、後期（24）の土器が出土した。24は、深鉢の胴部で非常に薄く削られており、後期後半のものと考えられる。

32から35はB3-24グリッドから出土した土器である。本グリッドからは早期後葉（32）、前期前葉（32、33、34）のものを中心に少量の土器が出土している。32は、深鉢土器の胴部である。上端は口唇部のような形状であったが、破断面が見られたため偽口縁であると判断した。

36から48はB4-23グリッドから出土した土器である。本グリッドからは早期後葉（36、39、43、44、45、47、48）、前期前葉（40、46）、後期（37、38、41、42、49）が出土している。特に37、38、41、42、49は、接合する破片はないものの、施文具、調整、胎土が同様であったため、同一個体と判断した。43、47には、貝殻腹縁により羽状を呈する連続刺突を施文するという特徴が見られる。特に47は口縁部であり、口唇部は貼り付けにより装飾され、貼り付けに貝殻による

第1表 第2次調査出土土器観察表①

図版 番号	調査 区	遺構名	取上 No.	時期 土器型式	器形	部位	文様の施文工程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
1	B3-1	5号土坑	53	早期後葉	深鉢	頸部	上半に貝殻腹縁による刺突、下半に横位条痕	:横ナデ :横ナデ	:にぶい褐 :にぶい褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英をそれぞれ少量含む、焼成普通	
2	B3-1	5号土坑	61	早期後葉	深鉢	胴部	表裏に条痕を施す	:不明 :不明	:にぶい黄褐 :にぶい黄褐	繊維混入、φ2mm以下の長石、φ1mm以下の石英、金雲母を含む、焼成普通	
3	B3-1	5号土坑	65	前期前葉	深鉢	口縁部	口唇部に棒状工具による連続した押圧	:横ナデ :横ナデ	:橙 :暗灰黄	繊維混入、φ2mm以下の長石、φ1mm以下の石英を少量含む、焼成普通	
4	B3-1	5号土坑	92	早期後葉	深鉢	底部付近胴部	斜位に条痕を施す	:不明 :粗いナデ	:明褐 :黒褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英、黒雲母を微量に含む、焼成普通	
5	B3-1	6号土坑	3	中期後葉 加曾利E式	深鉢	把手	幅5mm以下の沈線による施文→ナデにより器面を整える、胴部との結合部に単節LRを施文	:ナデ :ナデ	:にぶい黄 :灰黄褐	φ2mm以下の石英、φ1mm以下の砂粒を微量含む、焼成普通	赤彩あり
6	B3-1	6号土坑	75	前期中葉	深鉢	胴部	格子状に無節を巻きつけた絡条体を施文	:不明 :横ナデ	:褐 :にぶい黄褐	繊維混入、φ1mm以下の石英、黒雲母、透明粒子を少量含む、焼成普通	
7	B3-1	6号土坑	I層一括	後期	鉢型	底部付近胴部	単節LRを横位に施文	:横ナデ :横ナデ	:褐 :にぶい黄褐	φ2mm以下の長石、石英を少量含む、焼成良好	
8	B3-1	7号土坑	5	前期前葉	深鉢	胴部	無節Lを横位に施文→縦位に貼り付け	:不明 :横ナデ	:灰黄褐 :にぶい褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英を微量含む、焼成良好	
9	B3-1	ビット1	2	前期中葉	深鉢	口縁部	無節Rを斜位施文→半裁竹管により縦位、横位、斜位施文→櫛歯状工具により斜位施文→口唇部へ沈線施文→口唇部を指ナデで調整	:不明 :横ナデ	:にぶい黄褐 :にぶい黄褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英、黒雲母を微量含む、焼成普通	
10	B3-1		26	前期前葉	深鉢	胴部	単節LRを横位に施文	:不明 :横ナデ	:暗灰黄 :黒褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英を少量含む、焼成普通	
11	B3-1		34	早期後葉	深鉢	底部付近胴部	表裏に条痕を施す	:不明 :不明	:橙 :にぶい黄橙	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英、黒雲母を微量含む、焼成普通	
12	B3-1		41	前期中葉	深鉢	胴部	無節Rを2条巻きつけた絡条体を縦位施文→同一絡条体を横位施文	:不明 :横ナデ	:橙 :橙	繊維混入、φ1mm以下の石英、黒雲母を少量含む、焼成普通	
13	B3-12	表土一括		前期中葉	深鉢	胴部	単節LRと無節縄文を順方向に撚り合わせた原体で施文	:不明 :ナデ	:赤褐 :褐	繊維混入、φ1mm以下の砂粒を微量含む、焼成良好	
14	B3-12	表土一括		中期中葉 阿玉台式	深鉢	胴部	横位沈線、棒状工具による列点	:不明 :ナデ	:にぶい黄褐 :灰黄褐	φ3mm以下砂粒を多量、φ3mm以下の石英、φ1mm以下の金雲母を微量含む、焼成普通	
15	B3-12	II層一括		前期前葉	深鉢	口縁部	斜位に無節縄文を押圧口唇部は棒状工具による連続した押圧	:不明 :横ナデ	:黒褐 :褐灰	繊維混入、φ1mm以下の砂粒を少量、φ1mm以下の黒雲母を微量含む、焼成良好	
16	B3-14		13	早期後葉	深鉢	底部付近胴部	表裏に条痕を施す	:不明 :不明	:にぶい黄褐 :灰黄褐	繊維混入、φ1mm以下の砂粒を少量含む、焼成普通	
17	B3-14		58	早期後葉	深鉢	胴部	表裏に条痕を施す	:不明 :不明	:にぶい褐 :にぶい褐	繊維混入、雲母を微量含む、焼成普通	
18	B3-14		74	早期後葉	深鉢	胴部	表裏に条痕を施す	:不明 :不明	:灰褐 :灰褐	繊維混入、φ1mm以下の砂粒、黒雲母を微量含む、焼成良好	
19	B3-14		91	後期前葉 堀之内式	鉢形	胴部	横位に幅2mm以下の沈線施文→隆帯と裝飾を貼付→刺突により穿孔	:不明 :不明	:明黄褐 :不明	φ1mm以下の石英、黒雲母、長石、砂粒を微量含む、焼成良好	
20	B3-14	189・286		早期後葉	深鉢	口縁部	横位条痕	:不明 :横ナデ	:にぶい黄褐 :灰黄褐	繊維混入、φ1mm以下の砂粒を微量に含む、焼成良好	
21	B3-14	表土一括		中期中葉 阿玉台式	深鉢	胴部	貼付文→貼付文に沿って刺突列を施文	:横ナデ :横ナデ	:にぶい褐 :褐	φ2mm以下の金雲母、砂粒を少量含む、焼成良好	
22	B3-14	II層一括		前期前葉	深鉢	胴部	2条の無節Rを巻いた絡条体を施文	:不明 :ナデ	:にぶい褐 :にぶい黄褐	繊維混入、φ2mm以下の砂粒を少量含む、焼成良好	
23	B3-22		3	早期後葉	深鉢	胴部	横位に条痕	:不明 :ナデ	:にぶい黄橙 :灰黄褐	繊維混入、φ2mm以下の石英を微量、φ1mm以下の黒雲母を少量含む、焼成良好	
24	B3-22		138	後期	深鉢	胴部	横位にケズリ	:ケズリ :粗いナデ	:にぶい黄褐 :明黄褐	φ1mm以下の黒雲母を含む、焼成良好	
25	B3-22		177	前期前葉	深鉢	胴部(底部付近胴部)	無節Rの擦糸文を横位施文→無節Rの擦糸文を縦位施文	:不明 :ナデ	:にぶい黄橙 :にぶい褐	繊維混入、φ3mm以下の少量の砂粒を含む、焼成良好	
26	B3-22		218	中期前葉	深鉢	胴部	無節Lを横位に施す	:不明 :横ナデ	:にぶい黄橙 :灰黄褐	φ3mm以下の砂粒を多量、φ1mm以下の金雲母を微量含む、焼成普通	
27	B3-22		301	早期後葉	深鉢	胴部(底部付近胴部)	表裏に条痕を施す	:不明 :不明	:明赤褐 :暗褐	繊維混入、φ4mm以下の砂粒を少量含む、焼成普通	
28	B3-22		321	中期前葉	深鉢	胴部	爪による押引文を左回りに施文	:ナデ :ナデ	:橙 :灰褐	φ3mm以下の砂粒を多量、φ1mm以下の金雲母を微量含む、焼成良好	
29	B3-22		331	早期後葉	深鉢	胴部	表裏に条痕を施す	:不明 :ナデ	:にぶい黄橙 :にぶい褐	繊維混入、φ1mm以下の砂粒を含む、焼成良好	
30	B3-22		379	前期前葉	深鉢	胴部	無節Lを横位に施文	:不明 :ナデ	:にぶい黄橙 :にぶい黄橙	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英をそれぞれ微量含む、焼成普通	
31	B3-22	サプトレ	II a層一括	前期前葉	深鉢	胴部	縦位に縄文の押圧→貼付文→横位に波状沈線	:不明 :ナデ	:にぶい黄褐 :黒褐	繊維混入、φ1mm以下の砂粒を少量含む、焼成良好	
32	B3-24		11	早期後葉	深鉢	胴部(口縁)	表裏に条痕を施す	:不明 :不明	:灰黄褐 :にぶい黄褐	繊維混入、φ5mm以下の砂粒を多量含む、焼成普通	
33	B3-24		29	前期前葉	深鉢	口縁	無節Rの擦糸文を縦位施文→無節Rの擦糸文を横位施文→口唇付近に3条の沈線施文	:不明 :横ナデ	:にぶい黄橙 :にぶい黄橙	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英を微量を含む、焼成普通	
34	B3-24		31	前期前葉	深鉢	胴部	無節Rの擦糸文により横位に施文	:不明 :ナデ	:暗褐 :にぶい黄褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英を微量含む、焼成普通	
35	B3-24	表土一括		前期前葉	深鉢	胴部	2条の縄文原体を横位方向に連続して押圧→無節Lを横位に施文	:不明 :横ナデ	:にぶい黄褐 :にぶい黄橙	繊維混入、φ1mm以下の砂粒、φ1mm以下の長石、石英を微量含む、焼成普通	

第2表 第2次調査出土土器観察表②

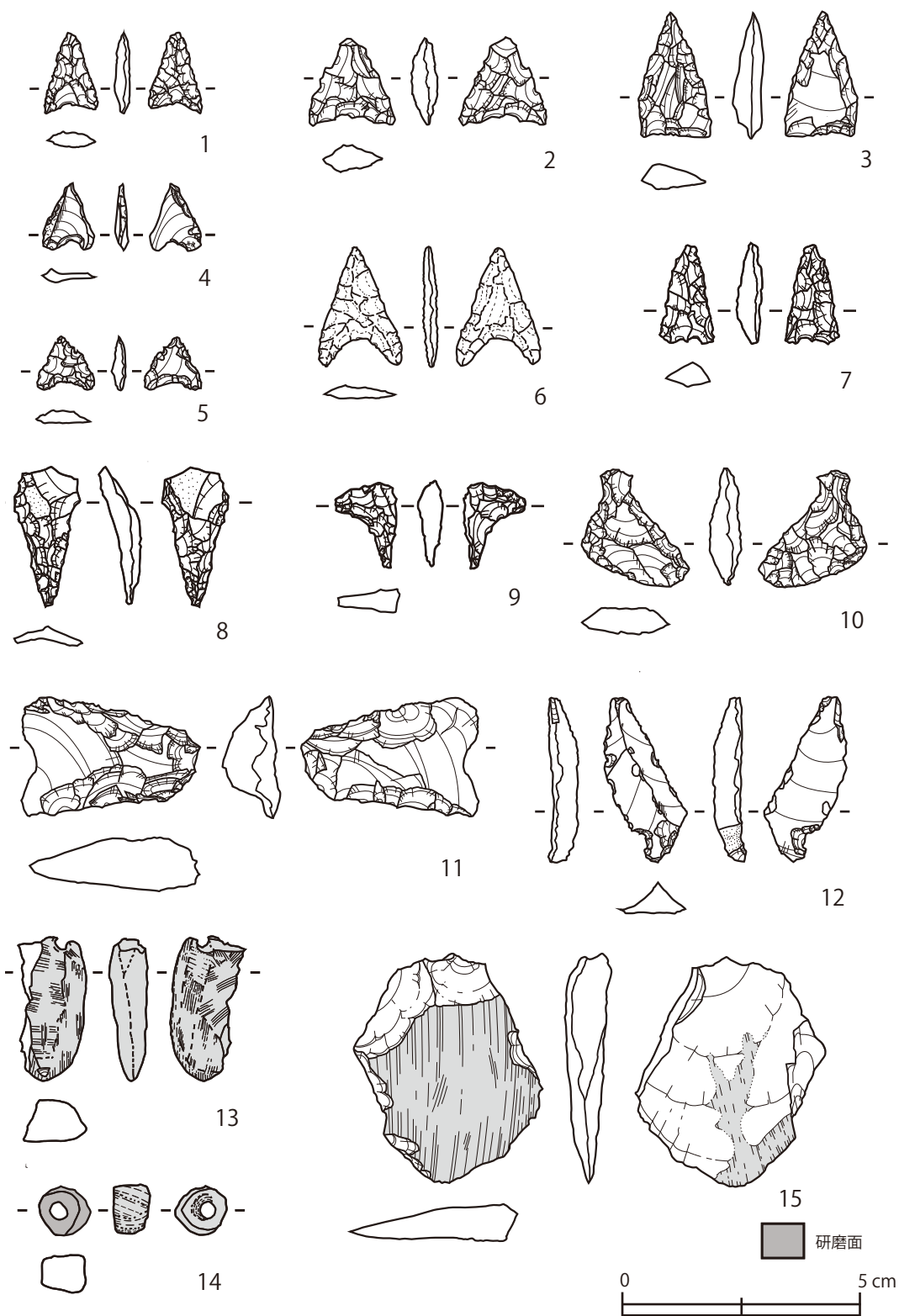
図版 番号	調査 区	遺構名	取上 No.	時期 土器型式	器形	部位	文様の施文工程ほか	器面調整 ：(外面) ：(内面)	色調 ：(外面) ：(内面)	胎土	備考
36	B4-23		7	早期後葉	深鉢	口縁部	表裏に条痕を施す 口唇部指ナデ	：不明 ：不明	：浅黄 ：浅黄	繊維混入、φ2mm以下の長石、φ1mm以下の石英、黒雲母を微量に含む、焼成普通	
37	B4-23		13	後期	深鉢	胴部	櫛歯状工具により斜位に 施文	：横ナデ ：横ナデ	：浅黄 ：黒	φ1mm以下の長石、石英、黒雲母を微量に含む、焼成良好	37、38、41、42、 49は同一個体
38	B4-23		17	後期	深鉢	胴部	櫛歯状工具により斜位に 施文	：横ナデ ：横ナデ	：にぶい黄橙 ：灰黄褐	φ1mm以下の長石、石英を微量に含む、焼成良好	37、38、41、42、 49は同一個体
39	B4-23		30	早期後葉	深鉢	底部付近胴部	表裏に条痕を施す	：不明 ：不明	：橙 ：黒褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英を微量に含む、焼成普通	
40	B4-23		31	前期前葉	深鉢	口縁部	口唇部指ナデ→横位に単 節Rしを転がす	：不明 ：横ナデ	：にぶい褐 ：にぶい黄褐	繊維混入、φ1mm以下の長石を微量に含む、焼成普通	
41	B4-23		33	後期	深鉢	胴部	櫛歯状工具により斜位に 施文	：横ナデ ：横ナデ	：黒褐 ：褐	φ1mm以下の長石、石英を微量に含む、焼成良好	37、38、41、42、 49は同一個体
42	B4-23		45	後期	深鉢	胴部	櫛歯状工具により斜位に 施文	：横ナデ ：横ナデ	：黒褐 ：褐	φ1mm以下の長石、石英を微量に含む、焼成良好	37、38、41、42、 49は同一個体
43	B4-23		70	早期末葉	深鉢	胴部	表裏の条痕を施す→貝殻 腹縁による羽状を呈する 連続刺突	：不明 ：不明	：にぶい黄褐 ：灰黄褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英、黒雲母を少量含む、焼成普通	
44	B4-23		114	早期後葉	深鉢	底部付近胴部	表裏に横位条痕	：不明 ：不明	：黒褐 ：にぶい黄褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英、黒雲母を少量、φ1mm以下の金雲母を微量含む、焼成普通	
45	B4-23		118	早期後葉	深鉢	胴部	斜位条痕	：不明 ：荒い横ナ デ	：にぶい褐 ：にぶい黄褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英を微量に含む、焼成普通	
46	B4-23		124	前期前葉	深鉢	胴部	無節しを絡糸体に巻きつ けたものを施文	：横ナデ ：横ナデ	：灰黄 ：明赤褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英、黒雲母を少量含む、焼成普通	
47	B4-23		138	早期後葉	深鉢	口縁部	胴部に横位に粘土紐貼 付、口唇部に貼付→貝殻 腹縁による羽状連続刺 突、口唇部貼付文に条痕 施文、貼付下部に穿孔	：不明 ：不明	：灰褐 ：にぶい赤褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英、黒雲母を微量に含む、焼成普通	
48	B4-23		142	早期後葉	深鉢	口縁部	表裏に横位条痕→表面に 弧状に沈線施文→半裁竹 管による縦位連続刺突→ 口唇部に針状工具で連続 刻目文	：不明 ：不明	：にぶい赤褐 ：黒褐	繊維混入、φ1mm以下の長石、石英、黒雲母を少量含む、焼成普通	
49	B4-23		175	後期	深鉢	胴部	櫛歯状工具により斜位に 施文	：横ナデ ：横ナデ	：黒褐 ：褐	φ1mm以下の長石、石英を微量に含む、焼成良好	37、38、41、42、 49は同一個体
50	C4-10		1	早期後葉	深鉢	胴部	斜位条痕→貝殻腹縁による 刺突を行う	：不明 ：粗いナデ	：にぶい黄褐 ：灰黄褐	繊維混入、φ3mm以下の砂粒、φ1mm以下の黒雲母を微量含む、焼成普通	
51	C4-10		5	早期後葉	深鉢	胴部	表裏共に斜位条痕	：不明 ：不明	：明黄褐 ：暗褐	繊維混入、φ1mm以下の砂粒、φ3mm以下の石英を微量含む、焼成普通	
52	B3-14		一括 遺物	9世紀前 葉 武蔵型	甕	底部		：斜位ヘラ ：ケズリ ：ヘラケズ リ→ナデ	：褐灰 ：にぶい赤褐	φ1mmの石英、角閃石、砂粒を微量含む	
53	B3-14		34、35	9世紀前 葉～中葉 武蔵型	甕	口縁部		：横ナデ ：横ナデ	：明赤褐 ：明赤褐	φ1mmの石英、角閃石、長石を微量含む	
54	B3-14		一括 遺物	9世紀前 葉～中葉 武蔵型	甕	口縁部		：横ナデ ：横ナデ	：明赤褐 ：明赤褐	φ1mmの石英、角閃石、長石を微量含む	

条痕文が施される部分がある。口唇の装飾の下部には穿孔されたと考えられる孔が見られる。

52から54はB3-14グリッドから出土した土師器である。52は、甕の底部である。外面には強い。また、外面や底面は熱を受け、ススの付着や黒化が観察される。鈴木徳雄氏の分類（鈴木1983）で7類以降と考えられる。53、54は、ともに甕の口縁部である。外面、内面ともにヨコナデが施される。頸部が一旦外反した後、さらに外反しており、比較的初期の「コ」の字状口縁であると考えられる。ともに鈴木氏の編年での8類と考えられる。（山崎太郎）

（7）出土石器の概要

第2次調査で出土した石器の総数は1,027点で、表採・表土層163点、Ⅱ層719点、漸移層15点、遺構内出土114点、不明16点であった。現地表面より彫器と見られる遺物が採集されたが、出土品のほとんどは、縄文時代の所産であり、一次調査同様、両極剥離の特徴を持つ楔形石器や石鏃



第10図 第2次調査出土石器

の出土が目立つ。滑石製の平玉や垂飾は古墳時代以降の遺物の可能性も考えられる。

第11図1～7は、石鏃である。1は、B3-24・Ⅱ層出土。灰色チャート製で、全体に丁寧な平坦剥離が施されており、形が整えられている。基部の挟りは浅い。2は、B3-22・Ⅱa層出土。青色チャート製。基部は浅く挟れる。先端部の調整は少なく、折損も確認できないことから成形途中で廃棄されたものと考えられる。剥離は全体に及び、原礫面、主要剥離面は観察されない。基部、左側縁は背面から腹面への剥離が新しく、右側縁は鋸歯縁状になる。3は、B4-23・Ⅱ層出土。灰色チャート製で、平坦な基部を持ち、形状は二等辺三角形を呈する。右側縁は、背面側の剥離が新しく、左側縁は腹面側の剥離が新しい。4は、B3-14出土。黒曜石製。凹基無茎で、剥片の周囲のみ加工を施し、剥片の主剥離面がほとんど残っている。右側縁は剥片の末端を断ち切るように加工が入っている。基部の挟りは浅い。5はB3-1の5号土坑出土。頁岩製。白色に風化する頁岩を用いて作られる。長軸が短く、正三角形に近い形状を呈する。基部の挟りは浅く、剥離は全周めぐるが、腹面に主剥離面が残る。6はB3-1・表土層出土。頁岩製。風化面が白色を呈し、表面がぼろぼろになっている。剥離面は明瞭に確認できないが、両面が剥離に覆われている。被熱を受けている可能性がある。7はB3-22出土。赤色チャート製、平基無茎で、形状は二等辺三角形を呈する。断面は三角形状になり、やや甲高の印象である。

8は、B2・C2で表採された石錐である。灰色チャート製、先端部分は両面に加工が入り、形状が整えられているが、基部は節理面をそのままにしてあまり加工をしていない。おおむね左側縁の剥離が新しい。9は、B3-22出土の石錐。黒色チャート製、半分に割れてしまっているため、元の形状が復元しづらいが、加工の具合からT字状の石錐が半分に割れたものととらえ、石錐とした。

10はB3-14・表土層出土。青色チャート製の石匙。青黒い筋の入るチャートを利用して製作する。剥離は、全面に押圧剥離が施されており、機能部と思われる下部の剥離は腹面方向の剥離が多く、その他は鋸歯縁状に剥離される。

11は、B3-12出土で、ピエスエスキューとした。灰色チャート製、素材は厚手の剥片で、主要剥離面が観察できる。複数回の敲打による階段状の剥離が両端に見られる。

12はB2・C2で表採。赤色チャート製の彫器。均質な良質のチャートを利用している。素材は末端に節理面を取り込むようなウートラパッセ状の縦長剥片である。彫刀面は基部に設けられ、背面から腹面への加撃により腹面を取り込んでいる。

13は、黒色滑石製の垂飾。表採のため表面に傷が多いが、複数の研磨単位が確認できる。左側縁は碎けて割れている。穿孔は正面から一つ、左側縁側から短軸方向に途中まで一つあり、T字状を呈する。しかし、後者は元の形をとどめず、研磨を受けているため、より大きい垂飾を長軸方向に半割したものと考えられる。14はB4-23・Ⅱ層出土の滑石製の平玉。円柱状に研磨され、中央に穿孔が施されている。側面は複数回の研磨単位が観察される。穿孔は一方向から行われて

おり、片面にのみ研磨の際にできたと思われる穿孔痕が観察される。

15は、B3-24・漸移層出土の磨製石斧調整剥片である。緑色凝灰岩製。背面には研磨痕が確認される。背面には剥離に先行して調整の剥離がなされている。腹面には一部研磨痕が残っており、剥片を再利用していたことが考えられる。
(渡邊 玲・佐藤悠登)

6. 調査の成果と課題

(1) ローム層堆積について

1次調査で不明だった点は、ローム層の堆積状況である。ローム層の堆積は隣り合ったグリッドでも状態が異なり、1次調査ではどう考えてよいのか分からなかった。表面採集で有舌尖頭器やナイフ形石器が拾われており、ローム層最上部やローム層中で石器が検出できるだろうという見通しでこの地点を発掘場所に選んだ。しかしローム層を掘ってみると、鹿沼パミスがローム上面から30cmほどで検出されたり、200cmで検出されたりした。また鹿沼パミスの上面が大きく波打ったり、鹿沼パミスが引き千切れたように堆積していた。

2次調査では1次調査よりも広範囲に調査区を設定し、ローム層の調査を行った。この結果、鹿沼パミスは水平に堆積する場所はほとんどなく、場所によって検出深度が異なる様相が明確になった。こうしたローム層堆積の疑問は調査指導に来跡した早田勉氏によって解かれることになった。ローム層深掘グリッドの大半で観察されたのは、山崩れ堆積層だったのである。鹿沼パミスを含む地層ごと後期旧石器時代のある時期に山崩れを起こしたというのだ。星野遺跡第1次調査のトレンチ土層断面図でも顕著に山崩れ堆積が確認できる。

山崩れ堆積物によって緩傾斜となった発掘地点には、その後、2次調査で明らかとなった縄文時代の遺構、土師器を伴う住居などが構築されたようだ。またA2-1グリッドでは、AT前後の暗色帯とみられる堆積層が確認された。火山灰分析の結果がまだ出ていないが、暗色帯とATの関係も明らかになるだろう。

(2) 地震痕跡

A2-1グリッドの西側壁面で確認された地割れは、地震によるものではないかとの指摘を中村由克氏から受けた。縄文時代以降の遺物包含層からローム層まで2mに及び、1～3cmも地層がずれていた。そして西側壁面の南西方向から北側壁面の北東方向まで3mに亘って地割れが伸びていた。栃木県内ではこうした完新世の地割れ痕跡例はあまり知らなかったのだが、群馬県に目を転じれば大間々扇状地等で確認される地割れ痕跡は、弘仁地震(818年)によるものと推定されている(群馬県埋蔵文化財調査事業団2013)。岡之内遺跡A地点の地割れ痕跡も堆積層の時期などから判断して、この弘仁地震によるものと推測されよう。

(3) 総括

表面採集による石器の様相から、縄文時代草創期から後期旧石器時代の遺跡を確認できるのではないかと本遺跡の調査を開始した。しかし2次調査までの結果からは、当該時期の遺物・遺構は確認できなかった。旧石器時代に起こった山崩れによってこの場所は大きく景観を変えたものと思われ、緩傾斜となった場所に縄文時代以降の生活痕跡が認められた。また818年に群馬県を中心に襲った大地震の痕跡の可能性のある地割れが2次調査で検出された。栃木県域では先例がないが、今後の事例増加を待ちたい。

(長崎潤一)

おわりに

調査にあたっては調査地地権者の島田明雄氏、同耕作者である島田幸一郎氏には、発掘調査を快諾いただいた。お二人には自宅敷地を駐車場としてご提供いただいた。記して感謝したい。調査にあたっては栃木県在住の研究者である酒巻孝光氏にご助言を頂戴した。また栃木県埋蔵文化財センターの芹澤清八氏、栃木県教育委員会の武川夏樹氏は毎年来跡いただきご指導を賜った。栃木県教育委員会の木村等氏、尾島忠信氏には調査にあたり様々なご配慮を頂戴した。感謝の意を表したい。

また最後になるが、下記の方々に調査の協力・助力、調査指導、差入れを賜った。深く感謝申し上げます。

青木 弘、井出浩正、岩井聖吾、小高敬寛、川畑隼人、久保田慎二、熊崎真司、小林謙一、小原俊行、酒巻孝光、芹澤清八、早田 勉、武川夏樹、竹田 瑛、伝田郁夫、中村耕作、根兵皇平、平原信崇、廣田吉三郎、三井 猛(以上、順不同、敬称略)。

注

- (1) 第1次調査概報(長崎ほか前掲)の「2. 調査組織」【調査期間】は「2014年9月1日～9月13日」と表記されているが、正しくは「2013年9月1日～9月13日」の誤りである。ここに訂正する。
- (2) 西田健彦氏のご教示による。
- (3) 早田勉氏(火山灰考古学研究所)よりご教示をいただいた。

引用・参考文献

- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013『自然災害と考古学 災害・復興をぐんまの遺跡から探る』
- 小林達雄編 2008『総覧 縄文土器』アムプロモーション
- 桜岡正信 2003「武蔵型甕について」『高崎市史研究』17 高崎市史編さん専門委員 1-16頁
- 鈴木徳雄
- 1983「北武蔵における土師器制作手法の画期」『土曜考古』7 土曜考古研究会 13-21頁
- 谷藤保彦・関根慎二編
- 1994『早期終末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 1997a『前期中葉の諸様相』縄文セミナーの会

1997b『前期中葉の諸様相—記録集—』縄文セミナーの会

2000a『早期後半の再検討』縄文セミナーの会

2000b『早期後半の再検討—記録集—』縄文セミナーの会

2006a『前期前葉の再検討』縄文セミナーの会

2006b『前期前葉の再検討—記録集—』縄文セミナーの会

長崎潤一・大網信良・村上育士・山崎太郎・渡邊 玲

2015「栃木県栃木市岡之内遺跡A地点第1次発掘調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』

第60輯第4分冊 早稲田大学大学院文学研究科 31-55頁

図版出典

第1図：栃木市発行「栃木市土地分類作業基図1」を改変、第2図～第11図：筆者作成